校友時報

昭和56年10月17日
編集人兼発行所
秋田県能代市高塙２番１号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 ㈱ 大勝堂印刷

購買設置される

前々から要望のあった購買がこのほど完成し、8月28日から文具類が販売されている。種類も豊富で便利と生徒間の評判も良いようである。

生徒の評判も上々

どれを買おうかな？

二、三年前から「設置してほしい」と生徒から要望のあった購買がこのほど完成した。これは第一体育館前廊下横の出入り口（元パン売場）の所にしきりと窓口を取りつけ購買に改築したもの。販売には、塚清紙店があたり、従来パン・牛乳を販売していた菅原牛乳店との共同運営していくこととなったものである。そのため以前二ヵ所あったパン売場は一ヵ所に縮小された。この購買、八月二十八日に開店し、これまで職員室で販売されていたのにくらべノート等の種類も豊富で買い求め易くなり便利と生徒間の評判も良いようである。

購買について売場の中田さんは「現在、購買は平日には八時三十分から四時三十分の間開いています。文具類なら何でもほとんどありますので多くの方に利用していただきたい。品物等で要望がありましたら言ってください。また、中に入って品物をじっくり見たいという声もありますが、盗難防止とスペースが狭いということで、学校から許可が出ていませんので、売場内には入らないようにしてください。」と話された。

県の許可出ず 設置延び延び

「購買設置」の要望は二、三年前にはさかんに出されていたが、ここ二年はまったくそのような動きはなく、生徒にとっては突然の購買設置だった。これについて購買委員会の鈴木（進）先生は「前々から生徒からも要望が出されていたし、先生方もその必要性は感じていた。しかし、いざ購買設置ということとなると問題もあり簡単にはいかなかった。というのは校舎が県の建築校舎、その中で業者が商売するのは問題があるとのことで県から購買設置の許可が出ず今まで延び延びになっていた。それでもこのほどやっと許可が出て設置の運びとなった。したがって二、三年前に出された要望が今かなったとみてください。」とのことであった。

ところで購買の設置された場所であるがあそこは、本来は非常口。しかし、今はしきりがつけられ、放課後になるとシャッターが降ろされる。そのため非常口として役割は果されず、非常の際の安全に不安が残る。その点については、「たくさんの人が通り、業者が出入りにも便利などの点からも現在の場所が最適である。たしかにこれまでは非常口になっていたが非常口としての開口部は体育館内をはじめ他の所でも充足されているので心配ない。」と話された。

長年の生徒の要望がかなっての購買だけに、今後、多くの生徒に親しまれ、利用されていくことが望まれる。

部説

読書のすすめ

校舎から見える田園風景はいつの間にか緑から黄色に変化を見せた。もうすっかり秋の感が漂っている。

秋といえば〝食欲の秋〟〝スポーツの秋〟と、楽しみ方が色々ある。その中で、部屋に閉じこもって本を読む〝読書の秋〟に注目してみたい。読書といっても、単に本を読むことという点だけで考えず、活字（例えば、この新聞のようなものでも）を読む点を考えてみよう。

近頃の高校生は活字離れの傾向にあると言われる。国語の先生から「どうも能代高校は国語のテストが悪いようだ。あまり本を読んでいないからじゃないか。」という言葉を聞いた。そういえば、いつも国語の成績のいいある人は、休み時間になると本を読んでいる。机の中にぶ厚い難しそうな本があったのに驚いたことがある。読解力を養うには読書が必要だとあらためて感じたのだった。

朝、新聞を読んでくる人がどれだけいるであろうか？朝でなくても、新聞を読んでいる人はどれだけいるだろう。「スポーツ欄なら見る。」「番組欄なら……。」という返事がよく聞かれる。コラム欄だけでも読むことを勧めたい。去りにし高校受験当時、誰しも一度は読んだことがあると思う。一日一つ読むだけでいいのだ。何の苦労がいることが……!?また、スポーツ欄でも「見る」のではなく「読む」ようにするとよいと思う。

自分を向上させるためには、やはり読書は必要なのではないだろうか。書き手が苦心さんたんして表した文章を読んで、理解しないまでも心に止めておくことは大切なことだと思う。

「私たちが本を読んでいられるのも今のうちだよ。大人になったら絶対読めないと思う。」と言った人がいる。その通りなのだ。本を読んでいられるのは今のうちなのだ。読書に何かを感じられるのも今のうちなのだ。それに気付かないまま、一生読書と遠ざかっていては悲しいと思う。大人になってから何かを感じることのできる本のなんと少ないことか。ある先生曰く「私のようにある程度歳をとると感動なんて言葉はなくなってしまうからね。」

「活字を読む」ということは大切なことだ。多くの言葉を知ることができる。また、多くの思想と触れ合うことができる。一日一ページ。一ヵ月で三十ページ。少しずつでもいいから、一冊の本を読んでみてはどうだろうか。また、せっかく配られたこの新聞、隅から隅まで読んでみてはどうか。読書をする人がこの秋に増えることを望みたい。

季節の窓

秋浅き
木の下道を少女らは
おほむねかろく靴ふみ来るも
中村憲吉

初秋の街路樹の下を少女らが歩いてくる。その少女らはおよそかるがると靴音をたてながら歩いてくる。

空部屋 しばらくはそのまま？

五月の生徒総会で、ギター部が廃部となった。そこで元ギター部室だった所が、現在空部屋となっている。この空部屋をめぐり多くの同好会・愛好会から使わせてほしいという声が高まっている。

◇アニメ愛好会◇

セル書きと、セルをかわかすための場所がほしい。また道具類を保管するための場所もないので、ぜひ部室がほしい。

◇フォークソング愛好会◇

ギター保管の場所がないので、部室がほしい。

◇JRC◇

いろいろな奉仕活動の内容を話し合ったり、物を作ったりする場所がないので、部室がほしい。

その他写真部からも声がかかっているとのことである。

それに関して、部室管理の当事者である生徒会執行部では次のように語っている。

「たしかに空部屋のまま放置して置くのはもったいないことである。だが、同好会・愛好会はまだ〝部〟として承認されていないため、部室を与えるのも理屈にあわない。」

さらに今後の対応について、

「現時点で、空部屋をどこかの同好会や愛好会にやるとはいえない。実績と見合ったところにと考えるのが妥当なのであろうが、現段階ではどこも同じような実績で、これだという決め手がない。しかしできるだけ早く、空部屋のための話し合いの場は持ちたいと考えている。」と続け、一応解決への姿勢は示しているものの、いずれかが部に昇格を、というニュアンスも漂っている。しかし同好会や愛好会が部に昇格するのは、ここ数年望めそうにもない。

釈然としていない説明ながらも、生徒会側は前向きな態度であるし、一日もはやく適切な処置が、期待される。

共に不信任となる 再選挙は十九日に

去る十月七日、生徒会役員選挙の生徒会長および副会長立候補者に対する信任投票が行われた。その結果、会長に立候補した米田晃君（二C）、副会長に立候補した岩村史弘君（一F）ともに不信任となった。なお、票の内訳は次のとおりである。

米田　晃	信　任	一三二票
	不信任	八〇五票
	無　効	三一票
岩村史弘	信　任	二七六票
	不信任	六六三票
	無　効	三〇票

〈解説〉 この結果を見てもわかるように全校生徒の大部分が信任を認めなかったわけだ。これは、立候補者の演説に説得力がなく、明確な意思表示がされていなかったのに加え、投票をするときに、自分の意志ではなく、他人に同意して投票するというように付和雷同で真剣でなかったことなどが主な理由と言えよう。

また、今回の選挙では、投票直前に投票用紙が盗まれるという不祥事も起きた。このことからもいかに全校生徒が選挙を軽視しているかというのが明らかである。

ところで、再選挙が、十月十九日に行われるわけだが、今度は、一、二年生の各クラスから候補者を二名必ず出すことになっている。次回は、一人一人がもっと関心を持って真剣に考えて投票してほしいものである。

弁論

須藤さん二年連続優勝

本校の視聴覚室で九月二十一日の放課後、第四回校内弁論大会が国学院大学・東北学院大学の各大会へ代表派遣する予選をかねて行われた。

今大会には一年生三名、二年生五名、三年生三名の計十一名の弁士が出場し、〝今、明日に向かって社会の矛盾を考える〟というテーマについて熱弁をふるった。

その結果、一位は須藤陽子さん（三C）の「偏見を越えて」、また二位は渡辺正純君（三D）の「現在自然真営道。―明日では遅すぎる―」、そして三位は佐々木高君（二D）の「学歴社会に向けて」と決まった。審査員を代表して秋元先生が講評を次のように語ってくれた。「準備のよく整った原稿と、準備の不十分な原稿があった。だからもう少し気を使って文章を書いてもらいたい。それに代名詞をもう少しひかえて、もっと自分の考えに浮かんだ言葉を使ってもらいたい。」

尚、須藤さんは、十一月七日に国学院大学で開かれる〝第三十一回全国高等学校弁論大会〟へ、また、佐々木高君は十一月三日に東北学院大学で開かれる〝第三十四回北日本高等学校弁論大会〟へ、それぞれ本校代表としての出場権を獲得した。

ブラバン

Aクラスで銀賞

去る九月六日に、秋田県民会館で秋田県吹奏楽コンクールが行われた。本校にとってAクラス（四十一人以上五十人以下）入り後初の全県大会であったが、健闘し五位の銀賞に食い込んだ。

この大会に先立って行われた県北大会で二位入賞を成し遂げ、その勢いをかっての県大会の出場権であった。両大会での演奏曲目は、課題曲には櫛田胅之扶作曲の「吹奏楽のためのコラージュ」、そして自由曲にはヴァーツラフ＝ネリベル作曲の「二つの交響的断章」の二曲であった。

今回の大会の入賞について吹奏楽部部長の長岡卓弥君は「今回は悔いの残らないようにと一生懸命やりました。夏休み中の練習も昨年の倍近くやったけれども、やはり全国一といわれる秋田県のレベルの高さを痛感しました。今後は、部員が多くなったためチームワークが乱れがちだから、何をやるにも自分の事ばかりでなく、他人に迷惑をかけないように心がけて、より上位をめざしてがんばってほしい。」と語ってくれた。また同部顧問の浅野先生は「今年はAクラス入りして二年目になったばかりだったことと、他の学校の演奏がすばらしいもので、やはり秋田県のレベルは全国でもトップレベルにあるということを考え合わせても、銀賞をとれたという事はとても喜ばしいことです。それに、本校は進学校で練習時間に自然と制約がでてくるので、その制約内をいかにうまく工夫するかによって上位入賞も不可能ではないと信じてます。」と話してくれた。

交通安全の映写会行われる

去る九月二十一日から十日間に渡り、秋の交通安全運動が行われた。本校でもこれにちなみ、二十八日（月）、交通安全教育の一貫として、「さらば交通戦争」の映写会を本校体育館で行った。また受験勉強のジレンマに悩む一少年の姿を描いた「ゆがめられた青春・砂の家」が同時上映され、それぞれ大いに反響を呼んでいた。

臨時総会

女子テニス〝部〟に昇格

十月七日、「女子テニス同好会の部への昇格」について臨時生徒総会が開かれた。同同好会会長村岡史子さん（三A）による主旨説明の後、生徒側からの質疑もなく、即採決となり、満場一致の承認をうけて、「女子テニス部」が生まれた。

昇格の主な理由は、

・練習、合宿等、日常の活動面は男子庭球部と同等差異はなく一応の成果も上げてきた。

・個人負担が大きく、そのため入部する人が少ない。

などである。

女子テニス部は、昭和五十四年四月同好会として発足した。それ以来毎日練習に励み、短期間にめざましい活動を続け、今年は、全県総体団体戦三回戦進出、県体でも四回戦進出をはたしている。

女子運動部が認められたのは初めてで、今後活躍が注目される。

三角点

▼今年、一九八一年は、国際障害者年である。交通事故、薬の副作用、公害など様々な原因によって起こる身体障害。現在、この問題を抱えている人が世界にどれだけ多くいるか計り知れない。▼十月上旬、サリドマイド障害を持つ辻典子さん主演の映画、「典子は、今」が公開される。典子さんは、熊本市に住む十九才の市役所職員。母親が妊娠初期に服用したサリドマイド剤の影響で両腕のないまま生まれてきた。それを克服し、二十六倍の採用試験を突破して、みごと採用された。両腕の代わりは全て足がする。彼女の足はタイプライターも打てば、筆をとって書道もするし、マンドリンも弾ける。彼女の自らが社会に飛び込もうとする姿に改めて感動を覚える。▼水準以上の知能を持っているのに体が不自由なためそれを生かせない。自分が悪いわけではないのに障害者ということだけで、特別視され健康な人間と同じ生活ができない。どんなにくやしいだろう。▼だが、ここで考えたいのは、健康な人間とはどんな人間を言うのかということである。私たちは一般に五体満足で体が丈夫であれば、健康な人間と考える。しかし、それだけでは必ずしも健康だとはいえないのではないか。▼校内暴力、白昼の小中学生による通り魔など、普通では考えられない事件がひしめいている現在、身体の健康はもちろんのことだが、それよりも大切なのは精神の健康ではないだろうか。そういう意味では、これらの事件の犯人たちはもちろん健康だといえるはずはないし、この人たちをこそ、障害者と呼ぶべきだ。▼将来、このような障害者が増えたらどうなるだろう。考えただけでゾッとする。私たちはこのような障害者を増やしてはならないし、また何よりも自分自身そうなってはならないのだ。▼国際障害者年にあたり、通常叫ばれている社会福祉とはまた別の面から考えてみる必要があると思う。